2013年8月13日付
『三陸新報』1面

連載 堤防とまちづくり ①

100年後の答え探す

東日本大震災から2年5カ月、気仙沼市はいまだ堤防議論で揺れている。「安全を守りたい」「浜の豊かな自然や暮らしを守りたい」という未来のための二つの思いが、計画されている防潮堤の巨大さによって矛盾してしまうからだ。何が正しいのかは、現段階では分からないが、住民も行政も答えを模索し続けている。南三陸町の状況も含め、堤防議論の「今」を6回シリーズで追う。

「気仙沼にも『ぜひ造ってくれ』という人がたくさんいる。レベル1の津波が来たとき、『堤防のおかげで命を救えた』『あのときは批判されてすごくつらかったけど良かった』と思いたい。これから生まれてくる子孫のためにもかたくなにこだわりたい」。村井嘉浩県知事は7月8日の定例記者会見で、堤防高変更を否定し続ける理由を語った。

村井知事が「妥協する余地はない」と繰り返す県沿岸の堤防高が決まったのは、震災半年後の23年9月。国が示した基準に従い、気仙沼市内は117年前に発生した明治三陸地震津波を防ぐ高さに決めた。

頻度の高い津波（レベル1）を堤防で防ぎ、東日本大震災級の津波（レベル2）は避難しようーという考え方で、津波が堤防を乗り越えても破壊されないように表面はコンクリートで覆うことにした。

国が示した堤防高の設計方法には、「環境保全、周辺景観との調和、経済性、維持管理の容易性、施工性、公衆の利用などを総合的に考慮して適切に設定する」と住民との合意形成に選択肢を残しているが、未来の安全を優先する村井知事の方針によって打ち消されている。

◇　◇

海抜9・9㍍の堤防が計画が示された鮪立漁港。唐桑半島の大島側にあり、三陸地方のカツオ一本釣り漁発祥の地とされる漁業集落に、当初は湾内を囲むように堤防を張り巡らせる計画が示されていた。現在は、漁港への影響が大きいため、山側へ下げる案に変更されている。

鮪立まちづくり委員会（鈴木伸太郎委員長）は今年3月、移転者を含めた中学生以上の564人からアンケートを回収。防潮堤について約7割が「必要」と考えているものの、計画の9・9㍍を支持したのは35％で、20％が「5㍍」、6％が「原形復旧の1・2㍍」、17％が「不要」と考えていることが分かった。

居住場所や年代によって意見が異なり、地区の総意を前提とした「合意形成」にはほど遠い状態の中、海岸管理者の県は堤防の位置を陸側にずらして傾斜を緩やかにしたり、道路との兼用堤にする案を作成したりして理解を得ようとしている。海岸から堤防が離れることなどを国が少しずつ認めたことで、位置や形状についてはアイデアを出せるようになったからだ。

しかし、鈴木委員長（70）は堤防が漁港と集落を隔てる影響を心配し、「9・9㍍の高さありきでは、何度話し合っても合意の出口は見えない」と指摘。「100年に1度の津波を防げても、毎日の生活が不便になることで、堤防ができたら鮪立を出て行くという人もいる。県はここで生活していく人の視点も大切にしてほしい」と話し、生活と減災を両立させる案を模索している。

（今川悟）

鮪立地区

アンケートで意見分かれる
県は位置と形工夫
合意の出口見えず

高さ9.9㍍の堤防整備が計画されている鮪立漁港